

令和7年度 上田市立南小学校 学校自己評価シート【前期】

学校教育目標		めざす子どもの姿	評価基準				総合評価	
つよく たくし く あたたかく		えがお輝く南っ子	A…達成できた B…おおむね達成できた C…やや達成できなかった D…達成できなかった				グランドデザインの重点目標・南小の宝や各プランを意識し、子どもたちの良さを認める職員集団を構築しようと努めている。児童は学び合いや清掃、あいさつ活動を通じて主体的に成長し、互いに高め合う姿が見られる。一方で、意欲や表現の偏り、習慣化の不足が課題であり、環境づくりや働きかけを工夫し、全体の力をさらに伸ばしていきたい。	
目標	評価項目	評価の観点	A	B	C	D	成果と課題	改善策・向上策
重点目標 【自分の考えをもち表現し合う】 「わくわく学び合い」を合い言葉に	■インクルーシブな視点での授業改善	テーマ別の職員グループによる授業改善や、合理的配慮と授業のユニバーサルデザイン化		○			授業改善の工夫が広がり、児童の主体性を支える雰囲気が育ってきたが、合理的配慮や導入・課題提示の工夫には、まだ充実させたい部分がある。	視覚支援や板書等のユニバーサルデザインを工夫し柔軟な授業設計を継続するとともに、支援員や専門スタッフと連携し校内で共有する。
	■授業の3観点を意識した授業づくり	子どもから生まれる“問い”から始まる授業づくり、メリハリある過程、確実な見届け		○			問いや興味を生かす授業づくりが進み、個別支援も広がってきたが、学びが一部に偏ったり、授業の流れや振り返りが十分でない場面も見られる。	日常の疑問やつぶやきを活かして「問い」が生まれる授業を設計し、時間内で振り返り・まとめができるよう視覚支援やICTを活用して見届ける。
	■「考える・聴き合う・伝え合う」活動の重視	“一人ひとりで学ぶ”と“みんなで学ぶ”場面の効果的な位置づけ		○			「一人学び」と「協働学び」が意識され、対話的な活動が深まっているが、関わり方に差があり、聴く姿勢や考えをもつ力をさらに伸ばす必要がある。	目的や位置づけを明確にした授業構成で、情報提供や対話モデル提示を行い、短時間のペア活動から取り組みを進め、協働学習に慣れる機会を増やす。
	■子どもと創り出す探究的な学習の充実	地域やSDGs等を取り入れた軸にしたカリキュラムづくり～日常的な探究活動～		○			地域やSDGsを題材にした体験的な学びが広がり、社会や文化への関心も高まってきたが、時間確保や活動分野に偏りがあり、定着が課題となっている。	保護者や地域と連携し、身近な体験を学びに生かす工夫を行う。日常会話や異学年交流、自立活動にSDGsを自然に取り入れ、南小版カリキュラムマップを整備していきたい。
	■ICT機器の効果的な活用による授業づくり	学習内容や児童の実態や必要感に合わせてICT機器を有効活用		○			ICT活用で個別最適な学びや自己表現が広がり、意欲的な姿が見られるが、教員の経験やルール面に工夫の余地があり、より効果的な活用が望まれる。	児童へのICT利用ルールやマナーを丁寧に指導し、活用しやすい環境を整備する。校内で成果や課題を共有し研修を通じて学びの質を高める。
南小の宝 【根気よく清掃に取り組む】 「どんどん磨き合い」を合い言葉に	■無言清掃・気づき清掃の推進	高学年がお手本となる“南小の宝：ひざつき清掃”の推進や、協働することのよさ、奉仕の大切さの自覚を促す		○			高学年を手本に清掃意識や技術が定着し、主体的な取り組みが増えているが、清掃の意義や手順の理解は児童によって差があり、広がりが十分でない。	高学年による清掃や縦割り清掃を拡充し、教師と共に清掃の意味を対話的に伝える。用具や服装の指導、振り返りの時間を設け、自らの行動変化に気づく習慣を育てる。
	■望ましい生活習慣の育成	心と体を自分で守ること（学校生活や登下校時の安心安全な行動） 生活習慣3本柱（家庭学習・メディア・就寝時刻）の推進		○			家庭と連携し生活習慣や学習習慣が整う児童が増えているが、個人差が大きく、生活リズムやメディア使用の面で支援が必要だと感じる。	児童が家庭に発信できる力を育て、学校・保護者・地域が一体となった支援を行う。個別面談や啓発活動を通して、家庭と具体的な改善策を共有する。
	■体力・健康向上プラン	一校一運動（持久走）や外遊びの充実、朝のストレッチ運動による心身の柔軟性形成		○			運動習慣や体力向上への意識が高まり、積極的に体を動かす姿が増えているが、活動が偏ることや環境の影響で運動量に差が出ることもある。	体育や日課に短時間の走活動を組み込み、消極的な児童には手遊びから始めたり家庭や行事と連動したりして、楽しみながら運動を継続できる工夫を進める。
	■チーム支援体制の構築	学年の先生交流、合同授業等によるチーム支援 学年、特コ・いじめ不登校対策委員会の充実		○			学年内での情報共有や連携が進み、児童理解が深まっているが、他学年や全体に広げる取り組みは、まだ十分に行き届いていない。	支援検討段階の児童情報を学年内で共有し、職員間で困り感を伝え合う場を増やす。相談体制を整え、支援を広げられる仕組みを強化する。
南小の宝 【明るいあいさつが響き合う】 「にこにこ響き合い」を合い言葉に	■道徳・人権教育・特別支援教育の充実	人権感覚、折り合いをつける力の育成や、多様性を包み込むインクルーシブ教育の推進		○			あいさつや返事、歌う活動が習慣化し、友達を認め合う雰囲気が広がっている。学年や学級で歌う機会にはまだ工夫の余地があり、今後は全員が楽しめる場の工夫が望まれる。	児童会で三役以外も役割を担える仕組みを整え、活動の数や重点を整理。なかよし学級や小規模活動を増やし、安心して異学年交流を深められる環境を支援していく。
	■児童会を中心とした学校生活・交流活動の充実	生活をよりよくするために、みんなで創り上げる児童会や、縦割りや姉妹学級での異学年交流の活性化。全校で取り組む学校行事での学び合い		○			児童会や縦割り活動を通して異学年交流が進み、一体感が育っているが、児童の活動の関わり方に差がある。	三役以外も役割を担える仕組みを作り、活動の数や重点を整理したい。小規模活動やなかよし学級の交流を増やし、安心して異学年関係を深められる環境を整える。
	■自己肯定感向上に向けた取り組みの充実	職員も児童も「さんづけ呼称」で広がる受容の輪		○			「さんづけ呼称」が定着し、相手を尊重する雰囲気が広がっているが、呼び捨てやあだ名で呼ぶ様子も残り、改善の余地がある。	意義を繰り返し伝え、学級活動や行事で意識化していく。呼び捨てが出た際は即時修正し、児童自身が意味を考え話し合う機会を設けたい。
	■あいさつ・返事・歌声の充実	あいさつ・返事の推奨による認め合う雰囲気づくりや、学年学級・音楽集会での歌声の充実		○			あいさつや返事が習慣化し、互いを認め合う姿が増えているが、歌や交流活動の機会は学年・学級ごとに偏る傾向がある。	毎日の会や授業で挨拶や歌を工夫して継続し、発表の形を見童主体で柔軟に考え、歌や集会の意味を全員で共有できる機会を増やす。
家庭・地域との連携 ～ひらく・つながる・ともに創る南小～	■学校運営委員会・南っ子応援隊との連携 ■家庭・PTAとの連携 ■地域（中学校区）との連携	・信州型コミュニティスクール（CS）の活用・発展 ・子どもの自立のための保護者との連携や保護者への子どもたちの様子の発信（授業参観・通信・保護者との懇談等） ・家庭での生活習慣3本柱（家庭学習・メディア・就寝時間）の推進 ・幼保小中でつなぐ支援の連携や、民生児童委員会や自治会との連携（幼保小接続カリキュラム・移行支援会議・小中の接続の充実等）		○			外部（読み聞かせ・見守り・クラブ活動・学習支援等のCS・）や保護者との連携が進み、支援や情報共有が広がっているが、人手不足や経験不足のために、支援が十分に行き届かない場面もある。	保護者や地域人材の参画を呼びかけ、支援体制を広げていきたい。移行支援の仕組みを整備し、職員研修や情報整理で連携の全体像を共有しやすくする。家庭での生活習慣を整えられるよう学校からも呼びかけを続けていく。